

埋文やまがた



2017年 2月 28日

Web版第2号

(第58号)



山形県埋蔵文化財センター
『考古学講座』講演会
平成29年2月22日(水)

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地 TEL 023-672-5301(代) FAX 023-672-5586

ホームページ : <http://www.yamagatamaibun.or.jp>

メールアドレス : yac@yamagatamaibun.or.jp

平成28年度 文化財普及啓発事業

今年度、山形県埋蔵文化財センターでは、文化財普及啓発事業の一環として、「発掘調査説明会」、「職場体験」、「センター見学・遺跡見学」、「体験学習」、「なつやすみ子どもミュージアム」「発掘調査速報会(県教委と共催)」「考古学講座」等を実施しました。

発掘調査説明会

	市町村	遺跡名	遺跡種別	開催日
1	川西町	壇山古窯跡群	窯跡	6月18日
2	川西町	八幡西遺跡 第1回	集落跡	8月20日
3	大蔵村	上竹野遺跡	集落跡	9月24日
4	米沢市	馳上遺跡・元立北遺跡	集落跡	11月3日
5	川西町	八幡西遺跡 第2回	集落跡	11月23日

職場体験

	団体名	期日
1	山形市立蔵王第一中学校	5月24日～26日
2	上山市内中学校「キャリアスタートウィーク」	7月5日～7日

体験学習

	団体名	期日
1	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	5月21日
2	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	8月6日
3	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	11月3日

センター主催研修・講座 等

	講座名	期日
1	なつやすみ子どもミュージアム 『やまがたの昔むかし』	7月19日～ 8月19日
2	埋蔵文化財センター「考古学講座」講演会	2月22日
3	山形県発掘調査速報会2016(共催)	2月26日

センター見学・遺跡見学・施設利用

	団体名	期日
1	上山市立南小学校(5年:センター見学、体験活動)	5月2日
2	平成28年度第1回市町村文化財担当者研修会	5月13日
3	長井市教育委員会(写真撮影研修)	5月24日
4	酒田市教育委員会(遺物鑑定)	5月31日
5	上山市地区公民館合同研修会(センター見学)	6月10日
6	平成28年度第2回市町村文化財担当者研修会 【八幡西遺跡】	6月24日
7	酒田市教育委員会(遺物鑑定)	7月12日
8	おおくら松の実塾【上竹野遺跡】	7月14日
9	米沢市上杉博物館(赤外線写真撮影)	7月19日
10	山辺町文化財保護審議会【馳上遺跡】	7月21日
11	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	7月27日
12	川西町学校教育研修所社会科専門部会 【八幡西遺跡】	7月29日
13	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	8月5日
14	みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2016	9月10日
15	川西町文化財めぐり【八幡西遺跡】	10月8日
16	山形県立米沢興譲館高等学校SSH事業	10月12日
17	山形市本沢郷土研究会 (赤外線による資料の観察・遺物鑑定)	10月17日
18	会津若松市教育委員会(赤外線による資料の観察)	10月21日
19	山形市本沢郷土研究会 (赤外線による資料の観察・遺物鑑定)	10月24日
20	尾花沢市玉野地区史跡保存会(センター見学)	10月28日
21	南陽市教育委員会(写真撮影研修)	11月7日
22	米沢市教育委員会(赤外線写真撮影)	12月15日
23	大江町教育委員会(遺物鑑定)	12月21日
24	寒河江市教育委員会(遺物鑑定)	1月26日
25	米沢市教育委員会(遺物鑑定)	1月27日
26	上山市教育委員会(遺物鑑定)	2月16日
27	九州歴史博物館(資料見学)	2月22日



やまがたビエンナーレ2016



川西町文化財めぐり【八幡西遺跡】

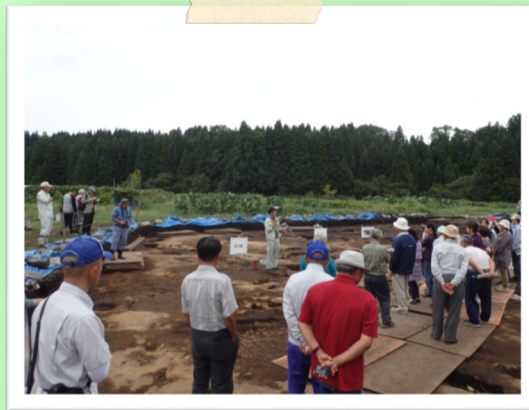
平成 28 年度発掘調査説明会 ②

上竹野遺跡

9月24日(土)

上竹野遺跡は、大蔵村清水字上竹野に位置し、最上川に合流する銅山川の左岸の段丘上に立地します。

今回の調査では、竪穴住居跡群、柱穴や土坑が集中する場所、捨て場、土器埋設遺構が集中する墓地と思われる場所が確認されるなど、縄文時代終末から弥生時代にかけての村の構成が明らかになってきました。また弥生時代の竪穴住居跡などは複数回の建て替えが認められ、住居のつくりが把握できる好例となりました。



馳上遺跡・元立北遺跡 11月3日(木)

馳上遺跡・元立北遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地する集落遺跡です。これまでの調査で、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が確認されています。

○馳上遺跡

検出された遺構は蛇行する河川跡や古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡のほか、土坑、井戸跡、溝跡、柱穴などです。また、中世に属すると考えられる遺構として掘立柱建物跡があります。その他に近代の溝跡が検出されています。

○元立北遺跡

馳上遺跡の東に位置する遺跡で昨年度確認されました。今回の調査では2棟の竪穴住居を検出しました。いずれも大型の住居で、古墳時代の遺物が出土しています。そのうちの1棟からは、焼土や炭化物が大量に検出されたことから、火事のため焼けた住居(焼失住居)と考えています。



八幡西遺跡 第2回 11月23日(水)

八幡西遺跡は川西町の北端(西大塚)に位置しています。

今年度のA・B区の調査内容を振り返ると、当遺跡は古代(奈良時代)に集落が開かれますが、中世には人が去ったかのように低調になり、近世になると氣勢が上がって屋敷が形成されていきます。一般的に近世以降の遺跡は、文献史料や絵図などの資料が多く存在します。今後はこれらも探索し、当遺跡の内容や性格をより明らかにしていきたいと思えます。



※詳しくは『発掘調査トピックス』のページ参照。

※当日の配布資料は、別途ホームページにアップしてあります。ご利用下さい。

平成28年度 発掘調査トピックス

はせがみ

馳上遺跡 第8次

—古代の大規模集落—

米沢市

馳上遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地する集落遺跡です。今回の調査は8次調査になります。調査は農道を挟み調査区を東西に分けて行いました。

遺跡の時代は古墳から中世になります。主に平安時代の遺構・遺物が多く検出・出土しました。

主な遺構は掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとと竪穴住居跡たてあなじゅうきょあとです。そのほかに土坑、井戸跡みぞあと、溝跡、柱穴などが検出されました。

掘立柱建物跡には、倉庫と考えられる2×2間の総柱建物跡そうぼしらや3×4間の側柱建物跡がわぼしらなどが見つかっています。そのほとんどが北西に位置する河川跡付近に集中して確認されています。

このような建物跡の集中は、1～6次の調査でもみられていました。1次調査では船の停泊場所とも考えられる河川の張り出しが確認されています。

竪穴住居跡は9棟確認されており、2棟は古墳時代の遺構になりますが、その他は奈良・平安時代のものになります。

遺物はそのほとんどが東側の調査区に位置する河川跡から出土しています。一般的な土師器や須恵器の他に、皿・鞍・横櫛くら よこくしといった木製品や、土

器に墨で文字などを書いた墨書土器ぼくしょなどが出土しています。また、木簡も2点出土しています。何が書かれているかは現在調査中です。その他に遺物が出土している遺構として、土坑や井戸跡、竪穴住居跡があります。

馳上遺跡では一般の集落では出土しないような墨書土器・木簡・馬具である鞍などが出土しています。さらに多くの掘立柱建物跡が検出されていることから考えると、当時の役所に関係した集落・施設であったと考えられます。1～6次の調査の中で報告・検討されてきた遺跡の評価を改めて確認できたかたちになりました。（渡辺和行）



多くの遺構が検出された西側の調査区。遺構は調査区西側に集中して検出されました(上が北)。



倉庫と考えられる2×2間の総柱の掘立柱建物跡



土坑に一括で廃棄されたとみられる遺物

壇山古窯跡群は、川西町大字時田のJR米坂線中郡ちゆうぐん駅の近く、虚空蔵山のすそに立地する、奈良・平安時代の須恵器窯跡です。今回発見した須恵器窯は、4基あり、SQ3～SQ6窯跡と名付けています。

須恵器窯は、斜面につくられた登り窯で、焚口から煙突までトンネル状に一直線にのびるものです。この窯の作り方には、大きくふたつの方法があります。ひとつは、溝を掘って下半分とし、上半分の天井などは粘土で人工的に作り出すもので、半地下式の須恵器窯と呼ばれます。もうひとつの方法は、斜面地山にトンネルを掘り、窯とする方法で、地下式の須恵器窯と呼ばれます。

県内において発見される窯跡は、半地下式のものほとんどで、これは同じ様相を示す日本海側の影響をうかがわせます。古代の山形県にあたるでわのくに出羽国は、日本海側に中心地があり、須恵器窯の技術導入にも、そこからの影響が大きかったと考えられています。

今回の調査で発見された窯跡をみても、SQ3～5の3基は、半地下式のもので、天井は崩れてなくなっていますが、掘り窪めた地下や、失敗品の捨て場からは、大量の須恵器を発見しています。

一方でSQ6は、県内ではほとんど調査事例のない地下式の須恵器窯でした。地下式の窯跡は、太平洋側の地域に多く、その影響をうかがわせるものです。全長7m以上あり、深さは4mを超えます。最後はトンネル状に掘り抜いた天井が崩落したと考えられます。窯の床面には、崩落した天井にパックされた須恵器が大量に出土していました。

出土した須恵器は、これまでの調査成果から、すべて奈良時代終末から平安時代初頭にあたります。今後の検討によりさらに細かくこの時代を区切ることができるでしょう。

また、太平洋側からの影響をうかがわせる地下

式の須恵器窯の発見は、須恵器生産を担ったであろう地域の権力者たちが、出羽国という当時の行政圏の垣根を越えた独自の技術交流圏を持っていたことをうかがわせます。それはまた、地域の権力者たちが、国家権力の完全なコントロール下にはなかったことを意味するのではないのでしょうか。

今回の調査は、須恵器の年代判断の指標とするだけでなく、複雑な東北の地域権力を考察する上でも重要な成果といえるでしょう。

(天本昌希)



SQ6須恵器窯調査風景。人物の足元が床面、スコップで指しているのが煙突部分になります。

やわたにし 八幡西遺跡

—近世・近代集落の面的発掘—

川西町

八幡西遺跡は川西町北端の郊外（大字西大塚）に位置しています。遺跡の範囲は現在の「八幡西」区域（字因幡一・八幡三）にほぼ重なりますが、発掘した7000㎡は既存集落の真下に当たります。調査の結果、その前身と考えられる近世（江戸）から近代（戦前）にかけての集落が見つかりました。

集落は屋敷地と水田・畑、墓などで構成されています。屋敷地は溝で方形に圍繞された区画が複数隣接し、それぞれ内部に数棟の掘立柱建物と井戸や水場（木組み・石組み）を伴います。中でもSB243掘立柱建物は東西14.1m・南北6.2mと大型で、西面

ははっきりしないものの、東西北面には廂を持ちます。柱の配置から復原される間取りは米沢藩の民家（高持百姓クラス）の特徴に一致します。

耕地は屋敷地に隣接し、低地に水田が、微高地には畑が営まれ、地形に基づく土地の利用がうかがわれます。

このほか、藍色の染料が付着した桶が埋設された土坑と水場、低地に設置された水車から成る空間もあり、染色に従事した場の可能性があります。また、掘立柱建物と作業小屋と考えられる竪穴建物が併存する敷地もあり、農業以外の手工業生産も集落の生業だったのかもしれませんが。

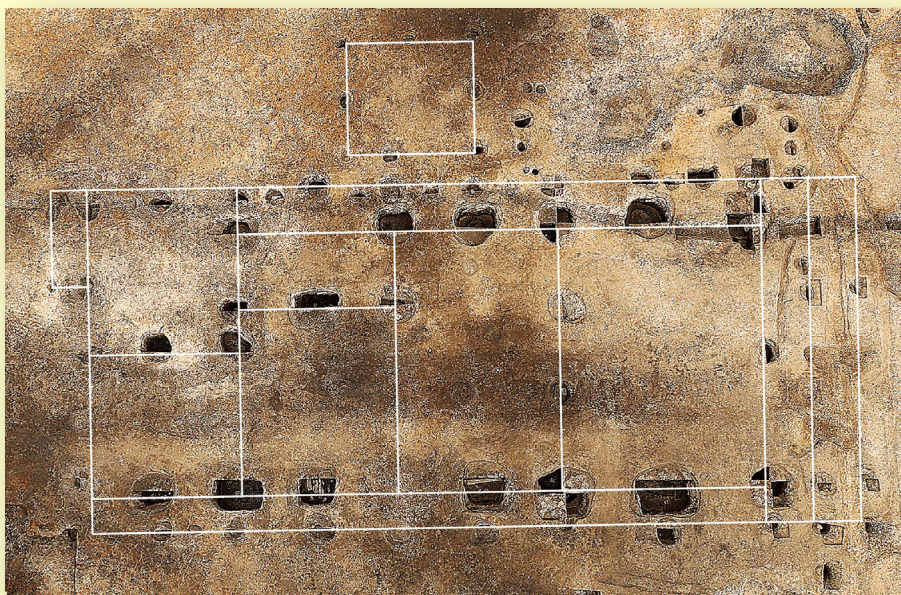
八幡西遺跡の近世・近代集落のあり方は、現代（戦後）の「八幡西」集落に継承され、地域社会の基盤を成すものも少なくないと考えます。来年度の2次調査では実態の解明にまた一歩近づけるものと期待されます。

また、遺跡からは古代（奈良平安）の井戸や溝なども確認され、土師器・須恵器のほか、竈形土製品や風字硯といった仏教関連遺物も出土しました。こちらも今後の展開に期待が高まります。

（菊池玄輝）



藍色の染料が付着した桶(SK456)



大型掘立柱建物(SB243)



柱根と礎盤(SB243)

上竹野遺跡は、最上川に合流する銅山川左岸の段丘上に立地します。遺跡の主な時代は、縄文時代の終わり頃から弥生時代です。

今年度は第2次調査となり、国道458号線の東側が遺跡範囲に含まれることとなり、この部分を含めた調査区を設定しています。

主な遺構ですが、弥生時代を中心とする竪穴住居跡が6棟、捨て場、墓地と考えられる埋設土器群、土坑などがあります。弥生時代のST202竪穴住居跡は直径約9mで、遺跡内で最も大きい住居です。大量の土器や石器が捨てられていました。2カ所の炉跡や複数の周溝が確認されており、3ないし4回の建て替えや拡張が行われ、次第に住居の規模が大きくなっていったものと思われます。

国道東側の5区では、埋設土器が9カ所確認されました。大形の壺や甕を据えて上に鉢あわせぐちで蓋をしています。これらは弥生時代初め頃の合口土器棺で、遺体を埋葬した後に骨を取り出し納めた再葬墓と考えられます。また、土坑の中に土器や玉類を副葬品として埋納したと思われる土坑墓も見られます。

出土遺物は弥生時代の土器や石器が中心で、赤

彩された土器も認められます。また、体部全体に刺突文様を施した土偶や石剣など祭りや儀式用の道具も出土しています。

調査の結果、弥生時代の住居が集中する居住域、土坑や柱穴が集中する区域、生活で不要なものを廃棄した捨て場、埋設土器や土坑で構成される墓地など、県内では不明な点が多かった弥生時代前期から中期初め頃のムラの構成が明らかになりました。
(菅原哲文)



弥生時代の住居跡が重複して確認されました。手前から ST801・中央が ST808・奥が ST202 です。



再葬墓と考えられる合口土器棺です。大形の壺の上に鉢を逆さにして蓋をしています。



土坑の中の平らな石の上から土偶が出土しました。意図的に埋められたと考えられます。

前号
考古学クイズ
の答え

③

問題のような土製の人形は『土偶(どぐう)』と呼ばれ、女性を表していると言われていました。出前授業などで紹介すると、よく『埴輪(はにわ)』とまちがえられますが、埴輪はもっとずっと新しい時代(古墳時代)のもので、人型だけでなく、動物や道具・建物・円筒形など、様々な形のものがあります。古墳の装飾や、埋葬の儀式に使われたと考えられています。

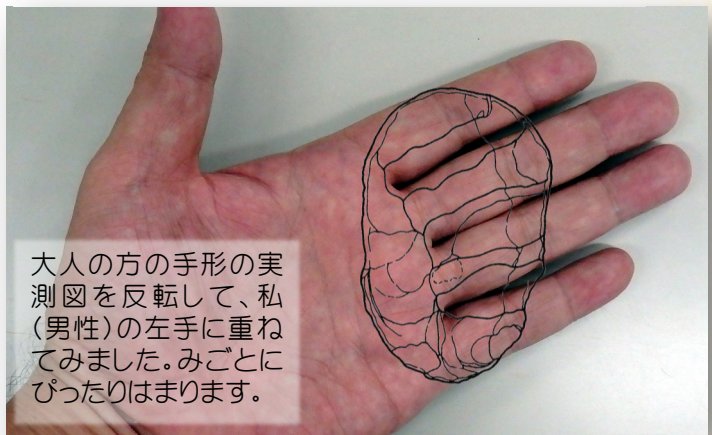
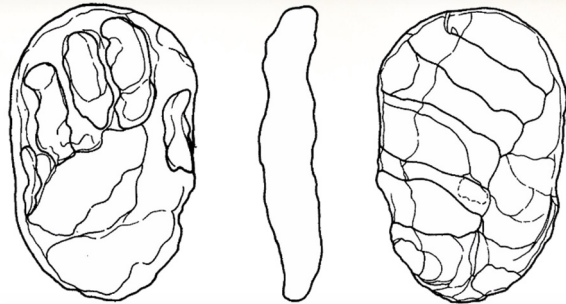
秘宝館

さいかいぶち

西海淵遺跡出土 手形付土製品



実物大



大人の方の手形の実測図を反転して、私(男性)の左手に重ねてみました。みごとにぴったりはまります。

西海淵遺跡は、縄文時代の大規模な環状集落^{かんじょう}が確認された遺跡^{とみなみ}で、村山市富並地区のほぼ中央、富並川河畔の田園地帯に位置します。今回ご紹介する『手形付土製品』は、平成2年度の県営圃場整備事業に係る緊急発掘調査で見つかりました。

長径約10cm 弱で、表面^{おもて}には大ききから1歳前後と見られる乳幼児の手形、裏面にはそれを取ったと思われる大人(おそらく男性か?)の手形がついています。どちらも左手のものです。

ここで、ふと疑問がわきました。自分が幼児の手形を取るとしたら……。あぐらをかいた脚の上に子どもを座らせ、しっかり抱えるような形で後ろから子どもの右手首をつかみ、自分の左手にのせた粘土に押し当てる……。でしょうか。この体勢で、わざわざ子ども

の左手を取るの是不自然です。つまりこの男性(お父さん?)は、正対や抱っこではなく、子どもの左側に位置して、手形を取ったのではと推測できます。

なぜ、左側にまわったのでしょうか。すでにお母さんに抱っこされていた?あるいは横たわっていた?いろいろと想像を巡らすことができそうです。

縄文時代の平均寿命は15歳程度という説があります。乳幼児期の死亡率が恐ろしく高かったであろうことは、想像に難くありません。15歳時の平均余命も十数年らしいので、30歳程度で十分長命だったのです。そんな時代に、無事生誕一周年を迎えたお祝いだったのか、あるいは……。

出土した場所が、環状集落の墓域とされる区画であったことも併せて考えると、思いは複雑です。

編集後記

裏表紙の『秘宝館』のコーナーですが、気がつくと3回連続で装身具関係になっていました。そこで今回は少し視点を変えてみることにしましたが、いかがだ

ったでしょうか。毎年ゴールデンウィークの頃に、うきたむ風土記の丘考古資料館にて『赤ちゃん手形』のイベントがあります。興味のある方は是非。